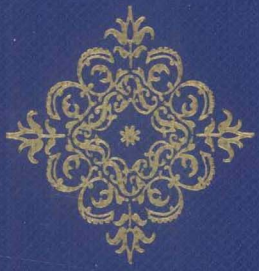

A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

51

尾崎士郎
火野葦平

中央公論社

日本の文学　51

©1968

尾崎士郎
火野葦平

昭和43年 6月 5日初版発行
昭和47年 9月 1日7版発行

発行者　山越　豊

版印刷　三晃印刷株式会社
貼印刷　株式会社トーブロ
印刷　株式会社大熊整美堂
真印刷　株式会社トーブロ
本文用紙　本州製紙株式会社
ロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　協和製本株式会社

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

尾崎士郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

目次

尾崎士郎
人生劇場（青春篇）　5

火野葦平
糞尿譚　261
麦と兵隊　308
歌姫　400
皿　420
鯉　435

ある詩人の生涯　455
注解　501
解説　吉田健一　512
年譜　526
口絵　「人生劇場」　中川一政
挿画　「人生劇場」　中川一政
「麦と兵隊」　向井潤吉

人生劇場（青春篇）

序章

「*三州吉良港」

一口にそう言われているが、吉良*上野の本拠は三州横須賀村である。後年、伊勢の*荒神山で、勇ましい喧嘩があって、それが今は、はなやかな伝説になった。そのときの若い博徒が、ここから一里ほどさきにある吉田港から船をだしたというので、港の方だけが有名になっているが、しかし吉良という地名が現在どこにも残っているわけではない。

その、吉良上野の所領であった横須賀村一円で「*忠臣蔵」が長いあいだ禁制になっていたことは天下周知の事実である。これは一面、吉良上野が彼の所領においては仁徳の高い政治家であったということの反証にもなるが同時に他の一面から言えば一世をあげて嘲罵の的となった主君の不人気が彼の所領の人民を四面楚歌におとしいれたこともたしかであろう。

まったく「あいつは『吉良』だ！」ということになると旅に出てさえ肩身の狭い思いをしなければならなかった時代があるのだ。しかし、そうなれば、こっちの方にも、（忠臣蔵なんてたかだか芝居じゃねえか）、――という気持が湧いてくる。（うそかほんとかわかるものか、あんなものを一々真にうけてさわいでいるろくでなしどもから難癖をつけられているうちのおとのさまの方がお気の毒だ）――

三州横須賀は肩をそびやかしたのである。相手にしないならしなくてもいい。そのかわり日本中の芝居小屋で「忠臣蔵」がどんなに繁昌しようともこの村だけへは一足だって踏み入れたら承知しねえぞ！

平原の中にぽつねんと一つ置きわすれられた村である。（村といっても矢作吉川の沿岸にあって、前には吉田という港をひかえているだけに運輸灌漑の便はおのずから交通の中心となって、いつのまにか、上町、下町、法六町、吹貫町といった風に村全体が一つの市街に構成されていたが）

しかし、さすがに明治になってからは片意地な理屈をいうものもなくなってしまった。それで村一ばんの劇場である本明座で、忠臣蔵が臍の緒切って興行されたこと

がある。すると思いがけないことがおこった。判官切腹の場であったが、大星由良之助が勢いこんで花道をかけてくる途中で、ひどい胃痙攣をおこしてしまったのである。

「力弥――由良之助は？」

「いまだ参上――」

と言ってから、ちょッと間を置いて、力弥に扮した色の生白い俳優が「つかまつりませぬ」というところだそうであるが、そこで、かんじんの由良之助が動けなくなってしまったのである。舞台では内匠頭が腹に刀を突きさしたままのすがたで痙れをきらしてうんうん唸りつづけているのに由良之助が花道でへたばってしまったのでは仕方があるまい。

芝居はこれでめちゃめちゃになった。これはいうまでもなく吉良上野の霊が祟ったのだということに衆議一決した。そこで、改めて丁寧な慰霊祭が行われ、興行がやりなおしになったが、このことが近村につたわると大へんな人気をあおって初日は小屋の割れるようなさわぎになった。ところがまたしてもそのどさくさのあいだに楽屋うらから火が起った。小屋は大混雑のうちにみるみるうちに焼け落ちてしまった。

忠臣蔵の興行がながいあいだうちたえていたのはそれがためであるという。しかししばらくたつと、一人の男がうまいことを考えついた。つまり、吉良上野の出る場面だけをすっかりカットしてしまったらいいじゃないかというのである。吉良を出さなくったってなぜ内匠頭が切腹しなければならぬかというくらいのことは見物にだってわからぬはずはあるまい。――すると、もう一つの積極的な意見があらわれてきた。「それもそうだが、そんならいっそのこと内匠頭をわるものにしてしまったらどうだ？」

その次の興行では、芝居小屋の前に〆縄を張った御堂がつくられた。うやうやしく吉良上野の霊がまつられたのである。それゆえ、木戸銭をはらった人たちはその前に立って、ぽんぽんと柏手を鳴らした。

舞台の上では俳優がすべて「師直」を誹謗する言葉を禁ぜられたのは当然である。そこで刃傷の場面がなくて幕があくとすぐ内匠頭が、「無念！」とさけんで切腹するという妙な芝居が出来上った。

この「吉良港」で、ある朝――村の遊侠児である太田仁吉が伊勢の喧嘩で死骸になってかえってきた。霧のふかい朝であったが、村はその噂で湧きかえるようだ。下町通りにある福泉寺前の広場にあつまる人の数はだんだんふえてくる。まるで、吉良邸からひきあげる赤穂浪士を見るような思いで――その中に、村の旦那衆のひとり

である辰巳屋の瓢太郎の蒼ざめた顔が今にも泣きそうになってぶるぶる顫えているのが際立って見えた。

まったく瓢太郎は悲しかった。これは、人情ぶかい彼の気質のためだとも言えるが、しかし、仁吉ときっかり結びつくことによって、とにかく村境までは肩を張ってあるくことの出来た彼が急にうしろ楯を失ってしまったためであると言えないこともない。(それほど村には小さいやくざ者が張りあっていたのである。そして、彼らの勢力がそれぞれのかたちで旦那衆がたの生活に影響していた)

こういう現象は、この村がながいあいだ孤立に置かれていた結果にはちがいないが、しかし、瓢太郎にしてみれば彼が途方もなく仁吉をすきであったという単純な解釈だけにあてはめることの方が一層適切である。

しかし、いずれにしても仁吉の死は村の形勢を一変した。荒神山のはなやかな大詰は吉良一円においての博徒の淋しい大詰でもあった。

まもなく仁吉一家はちりぢりになって、ケチな刃傷沙汰で監獄へゆくものもあれば、他国へ流浪するものもあり、意気地ない連中だけが町で小さい商売をはじめた。仁吉から多少の血統をひく常吉という男が瓢太郎の世話をうけて、法六町にある辰巳屋の借家のひと棟に「吉良常」と名乗る小料理屋を営んで、かすかにやくざ稼業の名残りをとどめていたとは言え、しかし、もう、「吉良常」に幅をきかせる時代ではなかった。

それゆえ、うすぎたない褞袍を着て、店頭にしょんぼり坐っている「吉良常」のすがたは誰の眼にも痛々しく映った。

仁吉が「吉良常」のことを「ぼんち」と呼んでいたので、それがいつの間にか彼の通り名になった。子供たちは、冬でも素足であるいてゆく彼のうしろから、

「ぼんちたびなし」

と言ってはやしたてた。すると、ようやく二十をすぎたばかりの「吉良常」は真っ赤になって子供たちの逃げてゆくあとから追っかけてきた。

子供たちの中によくないやつがいて、いつの間にか「ぼんちたびなし」を終いから言うくせがついてしまった。それがおかしいよりもかえって物哀れに聞える。そして、寒そうに肩をすぼめてあるいてゆく、この気のいい、人好きのする男のうしろすがたを一しおわびしくさせたのである。

瓢太郎は、ときどき滞納した家賃の言いわけにやってくる「吉良常」をみると露骨に顔をしかめてみせた。

「仁吉はえらかったな！」

——そういう瓢太郎の厭味は「吉良常」には一ばん辛かったらしい。そのころ、莨の製造業をお上に返上して、

肥料問屋をはじめていた瓢太郎はすでに五十をすぎていた。それゆえ彼の頭の中は八つになった倅の瓢吉のことで一ぱいだった。

辰巳屋の屋敷は法六町の半分を領有している。土塀の内側には松の並木がならび、うしろは宏大な竹藪が昼でもうすくらく煙っていた。

瓢太郎は、朝起きると、瓢吉をつれて屋敷の中をひとまわりすることを日課のようにしていたが、あるとき、うら庭の隅にある高い銀杏の木の下までゆくと、何か思いだしたように立ちどまった。

「瓢吉！」

彼は元気のいい声で倅を呼んだ。「この木へのぼってみろ！」

「この木って、どれでえ？」

「銀杏の木だ」

「高くてのぼれんがえ」

「のぼってみんでわかるか、――おとっつぁんが見とってやる、のぼれ！」

神経質な瓢吉は父親の様子がいつもとちがっていることを直感すると慌てて下駄をぬいだ。そして、裸足になってすぐのぼりはじめたが、銀杏の木は下廻りが、やっと彼の両手をひろげなければ抱えられぬほどの太さである上に、手がかりになる枝がないので、瓢吉の小さい身体がべったりと吸いついたと思うとすぐすべり落ちた。同じことを何べんくりかえしても同じだった。

「あかん！」

瓢吉の澄んだ眼が哀れみを乞うように顫えながら今にも泣きそうな顔になった。

「何があかん、――ほんなことでどうする、もっとしっかりやれ！」

瓢吉は半分べそをかきながら、しかし、同じことを何べんとなくくりかえしているうちにやっと両足を地上からはなして、銀杏の幹にすがりつくことができるようになった。

「よし！」

と、瓢太郎が叫んだ。「一銭やるぞ、遊んで来い！」

瓢太郎はにこにこしながら、瓢吉の手の届いたところに小刀でしるしをつけた。「毎日やるだぞ、あしたはてっぺんまでのぼれ」

「のぼる」

と、瓢吉が答えた。

「のぼったら何でも買ってやる」

「鉄砲を買ってくれるかえ？」

「買ってやるぞ」

――これが、瓢太郎の考えついた教育法だった。それ

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

ゆえ、毎日同じことがくりかえされた。小刀の目じるしはだんだん上へのぼっていってもう瓢太郎の手の届かぬところまでになった。そして、一ト月経たぬうちに、瓢吉は猿のようなあざやかさで頂上までのぼってしまった。

「おとッつぁん！」

上から、勝ちほこった小さい声が聞えてきた。瓢吉はうれしさで胸がわくわくしたが、しかし瓢太郎のよろこびはそれどころではなかった。

「手がはなせるぞ！」

上から瓢吉が叫んだ。

「よし、はなしてみろ！」――瓢太郎が下から手をふってみせた。（彼には倅のすがたが蟬のように見えた）

「えらいぞ！」

瓢太郎が手をたたいた。「そこから何が見える？」

「何でも見える――」

「言ってみろ！」

「馬が見える」

「馬がどこにおる？」

「橋の上におる――

（一台の駅馬車が春の陽ざしをあびて彼の視野の中をまっすぐに走ってくる）――遠い平原のはてに点在する村村が緑のかたまりのように見え、そして、彼の住んでいる町さえ、今は彼の眼の下にうずくまって、それは彼よ

りもずっと小さくなってしまった。

「万歳！」

と、瓢吉が腹一ぱいの声で叫んだ。何とうきうきした気もちではないか。遠い山が雲とすれすれになり、その下に見える鎮守の社は手をはなしただけですぐ飛んでゆけそうだ。

そのとき、下から瓢太郎の声が聞えてきた。「しっかりとまっとれ、手をはなしちゃいかんぞ！」

瓢吉はびくっとして下を見おろした。親爺が片肌ぬぎになって銀杏の幹に両手をあてているのが見えた。すると、かすかな波動が梢の方へつたわってきた。徐々にだんだん強く――それも最初は風があたるくらいの感じだったが、まもなく高い銀杏の木が前後に大きくゆれはじめた。

「しっかりとまっとれ！」

瓢太郎は絶えず下から声をかけた。瓢吉の眼の前では、あらゆるものがうごきだしたのである。そして、もう何を見ることもできなくなってしまった。

「おそげえ（怖いという意味）、おそげえ！」

瓢吉は夢中になって叫んでいるばかりだ。（幹がゆれるごとに全身の力がぬけて今にもふるいおとされるような気持で――）

「おそげえことはないぞ、――おりて来い！」

瓢太郎は汗びっしょりになっていた。そして、泣きながら、やっとおりてきた倅をみると、すぐに、

「鉄砲を買ってやる、来い！」

そう言って先に立ってあるきだした。

瓢太郎はこのとき、すでに自分の人生が終りにちかづきつつあることを知っていたのである。

それゆえ、彼の頭は瓢吉を育てることで一ぱいなのだ。彼は若いころからひどい胃弱で苦しんでいたが、それが難病の胃癌だということがわかったのは四十をすぎてからである。半年あまり彼は病院を転々としてくらしていた。しかし、どこへ行ってもよくなる徴候は見えなかった。それよりも、田舎の病院生活でわるいことをおぼえてしまった。それは、あるときの応急手当でモルヒネの注射をしたことだった。それが、今となると半日もモルヒネなしでくらすことができなくなっていた。最初のうちは知合いの医者の手をわずらわしていたのが、そんなことではもう間に合わなくなり、町の薬種屋が一週間に一ぺんずつ、こっそりモルヒネの瓶を持ってくるようになった。今は自分の手の届く範囲で注射する場所をさがすのさえ困難になってきた。注射のあとはすぐに赤黒く瘤のようにかたくなって、ときどき疼くように痛みだした。

モルヒネが切れかかると、目まいがして、頭がぼうっとなり、手がしびれてすぐ眠くなった。仕事がものうくなり、気力がめっきりおとろえてきた。瓢太郎は誰に対しても、まるで別人のようなやさしい男になってしまった。

「瓢吉――えらくなれえ、貴様はこの村の奴らの真似をするな、何でも無鉄砲なことをしなきゃあ、えらくなれねえぞ！」

そういうときには彼はきっと仁吉のはなしをして聞かせた。はなしているうちに仁吉はだんだん現実の人間から遠ざかって、すばらしい英雄になってしまった。それが瓢吉の頭に反映すると仁吉はいつも緋縅の鎧を着て白い馬に乗ってあらわれてきた。

瓢太郎が、そう言うのも無理がないのだ。三十をすぎると、この村では誰も彼もひねこびれた老人のようになってしまう。物資がゆたかで、生活に苦しむ必要のないせいもあるが、山にかこまれた平原に特有な気候の和やかさが村びとの野心を性欲にだけ限定してしまったからだと言えないこともない。まったく一夜の秋の夜祭で短い夜を楽しむために一生を棒にふってしまうような若者がざらにある。（矢作古川には、春近くなると、赤ん坊の死体が、うき袋のようにぽかぽかうかんでながれているのを毎日のように見たというはなしを得意になってしゃべった老人があるがこいつはどうだか、――）

辰巳屋の屋敷が売りに出たというわさがつたわったのは、瓢太郎の身体がすっかりいけなくなったころだ。事実はそれほど窮迫しているというほどでもなかったが、しかし、そのうわさはまもなく一つ一つかたちの上にあらわれてきたのである。まず、裏の竹藪が売りはらわれた。屋敷をかこんでいる松の並木が伐りとられた。それから法六町に軒をならべた辰巳屋の借家までも住んでいる男が知らぬうちに、いつの間にか大家の名義人がかわってしまっているといった風に――。

こういう慌しい変化は小さい瓢吉の眼にもありありとうつってきた。まったく誰にしたって落ち目になったが最後だ。瓢太郎が権柄ずくな顔をして大きな口をきいていたあいだは村じゅうが彼に親しみをよせていたのに、彼の方が人なつかしい静かな男になると妙なものでこんどは誰も彼も逆にじりじりと彼からはなれていった。

ある晩、彼の若い女房であるおみねが（おみねと彼とは二十も年がちがっていた）この村から一里ほどはなれている西尾在の実家へ行ってのかえりみちを村ざかいの堤防の上で、ひとりの男にうしろから組みつかれた。彼女は極度のおそろしさのために大声でわめきながら、手に持っていた蝙蝠傘で相手の男をめちゃくちゃになぐっ

たが男の力が強かったのでひとつき胸を小突かれるとそのまま堤防をころころところげおちて泥田の中にはまってしまった。おみねが帰ってきてからそのはなしを黙ってきいたあとで、瓢太郎は両腕をわなわなと顫わせながら不審なところをこまかに訊問した。あくる朝、村はずれの「番太小屋」のあとに住んでいる「甚」という泥鰌をすくってくらしている男が、こんなものが落ちていましたがもしやお宅のおかみさんのでは、と言って、堤防の下の草原にあったという簪を持ってやってきた。おみねがおそわれたのは夜中だというのだから、甚がそんなことを知っているはずはないし、それに、甚は長いあいだ瓢太郎から虫けらのように扱われていた男だから、よしんば、その簪に見おぼえがあったとしたところで、わざわざ持ってやってくるはずがない。

それゆえ、甚が来たことはますます瓢太郎をいきり立たせた。彼は甚の表情の中に「ざまを見やがれ！」という卑しい好奇心のひらめくのを感じたのである。そうなると、もういても立ってもいられなかった。

その日の午後——髭をはやした駐在所の巡査が甚のうちへやっていって、裏で泥鰌をさいている彼を無理やりにつれていってしまった。瓢太郎が訴えたのだ。しかし、結果はわかっていた。駐在所から放免されてかえってくると、甚は、まるで見てきたような嘘を村じゅうへ吹聴して廻った。それによると、その夜、堤防の上でおみねにおそいかかったのは一人や二人の男ではなかった。

「何しろ、お前、——あのおかみさんが蝙蝠傘をもって大声に怒鳴りながらなぐりかかったとおっしゃるんだがよ、へえ、——若え女がそんなときに声が出るもんかね」

甚は、いかにも渡りものらしい歯ぎれのいい口調で、うすぎたない興味を相手の心に唆りたてた。

甚が怒るのも無理はなかったが、しかし、それにしても何と哀れな瓢太郎よ！（まったく人間は落ち目になるものではない）——女房のことで騒ぎたてた亭主のみじめさは古往今来どこへいっても変りはないのだ。それゆえ、陥穽におとしこまれたものは甚ではなくて瓢太郎だったということになる。

村においての辰巳屋の人気はかくのごとくして地に堕ちた。それが瓢吉の生活の上にさえ濃い影をおとしはじめたのである。

「やい、瓢丹、待て！」

ある日、村はずれの学校からかえってくる道で、瓢吉が「番太小屋」の前の広場までくると、甚の長男である十四になる三平が、道中に待ち伏せている雲助のような顔をしてとび出してきた。

三平のうしろには村の悪たれ小僧が四五人、学校の鞄

をぶらさげたままの恰好で立っている。
「やい、こっへ来やがれ！」
三平の権幕にすっかり怯気だってしまった瓢吉が、泣きそうな顔をして立ちどまると、三平はわざと口をとがらしながら、瓢吉の胸倉をとってひきずっていった。
広場の向う側は田圃だ、――そこだけ土がくずれて崖のように傾斜しているので、往来からは見えなかった。早春の陽ざしがきらきらとうすい氷にうかんでいる。瓢吉の眼には、今、そこから帰ってきたばかりの学校の校舎が見え、その前の乾いた往来を吉田港の方へ、白い砂煙りを立ててのろのろごいてゆく荷馬車が見えたが、すぐに涙がにじんできて視野が曇ってしまった。
「名前を言え！」
と、三平が、たぶん村芝居か何かでおぼえた仕草にちがいない、――左肩をそびやかしながら手に持った棒きれを前へつき出した。
「瓢吉だがな」
と、彼が答えると、急にうしろにうずくまっている仲間の方を向いて、
「おい、瓢吉だげな、――瓢吉じゃねえ、瓢丹ずら（だろうという意味）」
そう言ってから、彼は二三歩あとへしりぞいて、いかにも小面憎そうに顔をしかめて、
「やあい、瓢丹が泣くぞ、泣く、泣く、やあい！」
子供たちが一せいに囃したてた。すると、三平が、
「やい、瓢丹、三年のくせに生意気だぞ！」
と叫んだ。「――お前はおりんに文をやったずら、やあい、おりんと夫婦になれ、また瓢丹が産まれるぞ！」
（三平は五年生だった。おりんは下町のすし屋の娘で三平と同級生だった。親父が早く死んでおふくろ一人の水稼業の家に育っただけに、子供にしてはませているし、華美な丈長をかけたり、袂の長い羽織を着て学校へかよってくるので、すぐ人の眼につく。だから、白壁のらく書きは大抵おりんのわる口にきまっていた）
しかし、三平の言葉は、臆病な一少年の心に彼の最後の誇りと名誉のために戦う勇気をふるいおこすに足るものであった。瓢吉は夢中になって三平に組みついていった。三平はむしろそう来ることを待っていたらしい。彼は瓢吉の頬っぺたを一つぶんなぐると、すぐに敵の両腕をねじあげてうしろへ倒してしまった。その上へ馬乗りになった三平の足へ瓢吉が噛みつく。それをはずすとこんどは三平が上から瓢吉の頭へかじりついた。瓢吉は頭がじいんと鳴ってもう抵抗する力をうしなってしまった。街道すじの「番太小屋」の向いにある駄菓子屋のおかみさんが瓢吉の泣き声におどろいて駈けつけたときには、瓢吉の首すじには赤く血がにじんでいた。

「さあ、言え！　言え！　おりんに文をやったずら、言えばかんべんしてやる」

三平はあくどいことばでからかいながら、しかしうしろへねじあげた瓢吉の手は決してはなそうとはしなかった。おさえつけられているうちに、瓢吉にはほんとに自分が何かわるいことをしたような気がしてきた。甚のうちの裏から、甚の女房がちょっと顔をだしたがすぐひっこんでしまった。

そこへ、反対側の畦道の方から不意に人の叫び声がした。

「野郎、大概にしておくもんだぞ！」

そういう叫び声といっしょに三平は横っ面を一つはりとばされた。慌てて顔をあげると、朝からやけ酒でも呷っていたのだろう。真っかな顔をして立っているのは、まぎれもない、「ぼんちたびなし」の「吉良常」だった。

何しろ子供の喧嘩にほんとうの侠客が顔を出したという話はあまりあるまい。三平をけしかけたやつが甚であるにしろないにしろ、とにかく損をした男は「吉良常」にきまっている。彼の胸の底にはまだ昔の旦那衆に対する「仁義」がほのぼのと煙っていたのだ。それゆえ、彼は格別、辰巳屋に義理を立てるつもりではなかったが、しかし、瓢太郎の倅の上に甚の倅が馬乗りになっているなぞということは彼の道徳と処世法の中には決してあり得べからざることだった。こいつは善悪の問題ではない。強弱の問題でもない。小さいやつと大きいやつの問題でもない。ただ、町の旦那衆と渡り者との問題なのだ。――「吉良常」がそう考えたかどうかは疑問であるが、とにかく、彼はその晩、「甚」親子をつれていって瓢太郎の前でぺこぺこお辞儀をさせた。

「吉良常」のやったことはまったく立派だった。だが、甚にしてみれば、これほど難癖をつけるに都合のいいことはあるまい。甚は昔の親分である「吉良常」にがみがみ言われたあとで外へ出てくるといまいましそうに何べんとなく唾液を吐いた。

――なあ、おい！　赤ん坊の腕をねじあげて男を売った親分を見たことあるめい！　へっ、馬鹿にしていやがる。

甚はその晩、上町の居酒屋で、馬方のような奴らばかりいる前で、一杯機嫌でとぐろをまいていた。しかし、痩せても枯れても「吉良常」である。彼のことを正面から悪く言うことができないとすれば、こいつは笑いものにしてしまうにかぎる。

「吉良の仁吉さんが泣くぜ」

と、甚が言った。「かりそめにも、――なあ、おい！　そうだずら、自分の血すじをひいた男が子供の喧嘩を買

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton